

©2020年6月

◎第1942回 定期公演 Cプログラム

■シベリウス

■交響詩「フィンランディア」作品26（約8分）

作曲家シベリウスの代名詞ともいえるこの有名な作品は、舞台劇『歴史的情景』で描かれた活人画「フィンランドは目覚める」の付随音楽（1899）を原曲としている。1900年、ヘルシンキ・フィルのパリ万博遠征公演で演奏するため、シベリウスはその付随音楽を単独の交響詩《フィンランディア》へと改編。ただし同年7月2日にヘルシンキで初演された際は、ロシア側の検閲を配慮して、《スオミ》（フィンランド語で「フィンランド」の意味）の曲名が用いられている。

舞台劇の最後を飾った「フィンランドは目覚める」は、「ロシアの圧政に抗するフィンランド、その輝かしい未来」を描写したものであり、《フィンランディア》も同内容を受け継いでいる。曲は激しい金管楽器の咆哮（ほうこう）で始まり、やがて闘争のファンファーレも聞こえてくる。すると一転して明るい曲調になり、勇壮な調べと敬虔（けいけん）な賛歌の対比を軸にしながら終結部のクライマックスへ向けて力強く駆け上がっていく。

なお、有名な賛歌の部分は後に合唱曲《フィンランディア賛歌》へと編曲され、人びとに親しまれるようになるが、往年の大指揮者レオポルド・ストコフスキーはその美しい旋律を「全世界の国歌」と呼んだ。

作曲年代：[舞台劇付随音楽] 1899年 [交響詩] 1900年

初演：[舞台劇付随音楽] 1899年11月4日、作曲家自身の指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団 [交響詩] 1900年7月2日、ロベルト・カヤヌス指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団

（神部 智）